



同窓会だより

同窓会だより

会 長 有 松 美紀子
副 会 長 野 内 昭 宏
専務理事 内 藤 義 隆

新潟大学は新制大学になって今年で70周年を迎えます。日本海側最大の総合大学であり、10学部あります。新設学部で卒業生がまだいない創生学部をのぞいて、それぞれの学部には同窓会があります。

私たち歯学部同窓会も、2021年には創立50年を迎えます。しかし、医学部学士会の創立110年には遠く及びません。会員数も、新潟大学全体の同窓生数のうちのわずか6%程度しかいません。

けれども、歴史が浅く、小さい同窓会であっても、実行力と強い結束があります。そして、当会の正会員は間違いなく新潟大学の卒業生でもあります。卒業年次も卒業学部も異なる人々も、国内にいる人も海外にいる人も、「新潟大学」というキーワードひとつで繋がることができます。

今年度は、そんなことを感じさせる2つのエピソードがありましたので、それをご紹介します。

【エピソード① 新潟大学全学同窓会交流会】

新潟大学を卒業した方々全員を対象として、平成17年に新潟大学全学同窓会が設立されました。それ以降、毎年、一学部（の同窓会）が担当になり交流会を企画運営してきました。単純計算では9年に一度当番が回ってくることとなります。

今年度は歯学部が担当でした。歯科の重要性を歯学部以外の方々に理解をして頂くこと

と、日本酒の魅力を確認し親交を深めることを目的として、「お口から考える全身の健康」というテーマで、全身の健康に関わる歯周病と、新潟県の誇る日本酒について、当同窓会会員で新潟大学名誉教授の吉江弘正先生（歯周病科前教授）と、新潟県醸造試験場場長・金桶光起氏にご講演頂きました。

多くの方々の興味と関心のあるテーマであり、お二人の軽妙でかつ内容の深いお話は大好評でした。

懇親会では、2019 ミス日本酒 新潟の鈴木聖袈さん（大学院修士課程2年、農学部）を司会に迎



講演される金桶場長と吉江先生



え、日本酒を囲んで世代や学部を越えた交流ができました。ここでのご縁が更に広がりを見せると

思われました。参加人数も昨年度より多く、参加者の満足度も大きかったようです。



懇親会も満席



会場を埋め尽くす聴講者

【エピソード② 新潟大学首都圏同窓会】

新潟大学卒業生で首都圏在住の方々を対象として、11月17日（日）、アルカディア市ヶ谷において、第48回新潟大学首都圏同窓会が開催されました。今回は歯学部同窓会が当番で、首都圏の各支部が合同で企画・運営を担当しました。首都圏と言っても広いので準備が大変だったと思います。

講演会は、横浜市立大学附属市民総合医療センター歯科口腔外科前教授・大村進先生（歯学科9期生）が「もしも舌癌になったら」という演題で楽しく、わかりやすくお話しされました。芸能人の口腔がんの話題があり、日々の診療でも患者様から聞かれることが多くなりましたが、参加者は熱心に聴講されていました。

会場には世代や学部を越えた100名ほどの同窓生が参加されていましたが、どの学部の方も若い方の参加が少ないことが課題であると異口同音に言われていました。しかし、会場では若い方を数名お見かけしました。学部に関係なく、新潟大学



懇親会出席の歯学部同窓会関係者

を卒業したということが大きな心の支えになっているようでした。

新潟大学の同窓生が一堂に集うという貴重な集まりを企画運営された歯学部首都圏同窓会の皆さま、大変お疲れ様でした。



懇親会の様子①



高橋学長を囲んで



懇親会の様子②



第48回新潟大学首都圏同窓会集合写真



同窓会学術セミナーを受講して

歯学科43期生 藤 森 章 浩

早いもので、今年で卒業7年目となります。その間、がむしゃらに外来診療を行ってききましたが、2年ほど前から週に一度、訪問診療に従事する経験もしてきました。

義歯を中心とした訪問診療をルーティンで行う日々でしたが、誤嚥性肺炎のリスクや、2025年問題などを知るにつけ、これからの日本の医療に、摂食支援という形で歯科医師が果たす役割の大切さを痛感しました。

勤務する法人を通じて、他のDrにVE検査を依頼し、嚥下訓練などを行いましたが、自分でも検査の施行や診断など、もう一段のレベルアップをと考えていた時に、同窓会誌にて今回のセミナーを知り、即申し込みをさせていただきました。

数年ぶりの新潟に懐かしさと、外来棟の移転により、自分たちが学んでいた頃とは大きく変わってしまった校舎に寂しさと緊張を感じつつ受付を

済ませました。しかしその後、伊藤先生や庭野先生、講義では井上教授や辻村先生のお顔を拝見し、普段受講する外部のセミナーでは決して感じるこのない、安心感が生まれ、自然と緊張がほぐれていきました。今回、同窓会セミナーは初めての受講でしたが、こういった安心感の中で勉強できることを大変嬉しく思いました。

午前中の井上教授の講義に続いて今回のメイン、VE検査のハンズオンが始まりました。研修医の頃に少し行ったものの、当時の私はその意味と重要性をまったく理解できておらず、その経験



は忘却の彼方です。大変申し訳ございません。そのような訳で、ほぼ未経験の状態に挑ませて頂きました。まずは患者役となり実際にVE検査を受ける事に。私は特に反射も強い方ではなく、検査して下さる先生も、私とは違い何度かご経験のあるベテランの方ということで、特段大きな心配はしていませんでした。が、これがなかなかつらいのです。検査自体はとてもスムーズに進んでいったのですが、それでも検査中咳き込み、つらいなあと思う事が何度かありました。この患者経験は非常にありがたく、今までなんとなく見ていた検査が、意外にも患者さんにとって負担になりうると身を持って体験することができました。

術者交代となり、いよいよ私が検査をする番に。カメラの持ち方、立ち方、患者の位置から素人丸出しで、指導医の先生に教えて頂きます。必死にカメラを進め、画面を覗みつけます。検査項目がいくつかあるのですが、正直、「次は何の検査だったか」などと思う余裕はありません。指導医の先生に言われるがまま、項目をこなしてい

ました。なんとか無事検査を終え、先生からは初めてにしては上出来と言って頂けましたが、明日から「私VE検査できます」などとはとても言えない、というのが素直な感想でした。

VE検査を実際に行う事については、より鍛錬が必要ですが、検査へのステップや、摂食、嚥下への考え方、検査の意味と評価など多くのことを習得できた、非常に有意義な1日でした。東京に戻り、すぐの訪問診療で拝見した、新患の方の摂食支援までの治療計画を、迷いなく立てる事が出来たのは、一重にこのセミナーのおかげです。ここを出発点として、さらに精進していければと思います。

最後に、丁寧な指導をして下さった、井上教授をはじめ、摂リ八科の先生方、貴重な機会を作ってく下さった同窓会の先生方、共に参加され、相互実習をおこなった先生方、そして新潟に前入りした私と、夜遅くまで飲みにつきあってくれた新潟の同級生に心からの感謝を申し上げます。ありがとうございました。





令和元年度新潟大学歯学部同窓会 学術セミナーⅢを拝聴して

歯学科28期生 大島 賢

令和元年11月24日（日）に開催された「新潟大学歯学部同窓会学術セミナーⅢ」を拝聴しました。

今回は「認知症高齢者の理解とケア～口腔ケアや食支援の視点から～」と題して、長岡赤十字病院 教育研修推進室・教育担当師長の宮本良子先生からの御講演でした（聴講者29名）。

超高齢社会（高齢者（65歳以上）の比率が21%以上）に突入した日本において、認知症高齢者数も自ずと増加の一途をたどっています。私の日常臨床においても、訪問診療に限らず、診療室でも認知症高齢者の診療を行わない日はないといっても過言ではありません。

講演では、認知症の診断とその臨床症状・経過についての説明から始まり、認知症患者に使われる薬物とその臨床効果、また、認知症に対しての国家の取り組み（認知症施策推進大綱及び総合戦略（新オレンジプラン））についても詳細な解説がありました。

歯科診療において注意すべき気づきのポイントとして、口腔内の状態の変化以外にも

- ・ 同じことを何回も質問する・職員に対する態度がきつくなるなど変化した・整容・身だしなみが変化した・診療室の出入口を間違える（以上抜粋）

など、ちょっとした変化を見逃さないことが重要

であるとのことでした。

また「認知症の人の体験を通して」という話題についてもお話いただきましたが、「不安」「自信の喪失」「混乱」「孤立」といった感情を抱いている方が多いことにも気づかされました。

以上を通して、我々医療従事者（に限らず、家族・周囲の方々にも当てはまりますが）は、認知症の方の気持ちを理解し、寄り添うことが大切であると感じました。

宮本先生からは、認知機能障害がある方へのコミュニケーション方法を具体的に御教示いただきました（まわりの雑音を減らす・視野にゆっくり入ってから話す・短くゆっくりはっきり話す・大事なことは繰り返す等）。早速実践しています。

誰にとっても「いつか来る（かもしれない）道」です。こちらがちょっとだけ気持ちにゆとりをもって向かい合うことで、認知症の方の心に寄り添えると良いなと思いました。

講師の宮本先生、歯学部同窓会学術委員の皆様、ありがとうございました。今後の学術セミナーも、楽しみにしております。

